浅見絅斎『靖献遺言』の構想と思想

Conception and Thoughts Of Asami Keisai（浅見絅斎）'s *Seiken-Yigen*（靖献遺言）

田宮昌子

江戸中期の朱子学者・浅見絅斎の『靖献遺言』は中国史上の「忠臣義士」八名を選び、その略伝と「遺言」を収録したもので、巻頭の巻一に屈原を取り上げる。本書は幕末以来、憂国憂民の青年たちの愛読書となり、近代日本においても広く出版・流布されて大きな影響力を持った。本稿はこの『靖献遺言』における屈原言説を読み説き、日本近代における屈原像の淵源に迫ろうとする。

キーワード：屈原イメージ、浅見絅斎、『楚辭師説』、『靖献遺言』

目　次

はじめに
一、『靖献遺言』について
二、『靖献遺言』編纂の思想
三、『靖献遺言』巻之一「離騒懐沙賦」の構成と内容
むすびに

はじめに

浅見絅斎（一六五二―一七一一）は江戸中期の朱子学者で、山崎闇斎門下の高弟「崎門三傑」の一人である（他に佐藤直方と三宅尚斎）。多くの著述を残した中に朱熹『楚辭集注』を講じた『楚辭師説』がある[1]。本書は朱子学が持った社会的影響力から江戸期の楚辞・屈原認識の形成に大きな役割を果たしたのみならず、明治から大正にかけて刊行された『漢籍國字解全書』に収められ、広く読まれたことから、近代日本においてもその影響は続いたとされる。筆者はこれまで中国文化史上の屈原像に関心を持ち、屈原および屈原賦についての言説をそのイメージの媒体として考察して来た。本研究は江戸・明治期の楚辞関連著述の再評価を目指す研究プロジェクトの一環で、筆者は浅見絅斎『楚辭師説』（以下、「絅斎」『師説』）に着目し、本書を通して、江戸期に流布し、近代日本に受け継がれた屈原像の構成要素を明らかにしたいと考えている。

崎門派および絅斎については、日本思想・儒学の観点からの研究が主流で、第一人者として近藤啓吾が知られており、本稿の執筆に当たっても大いに裨益を受けた。一方、崎門派における楚辞講義についての注目は極めて少なく、管見の限り、石本道明「淺見絅齋『楚辭師説』小考[2]」がある程度である。本稿では絅斎晩年期になる『師説』研究の前提として、壮年期に著され、生涯の代表作となった『靖献遺言』に絅斎の屈原像の原型を探る。

一、『靖献遺言』について

1、ふたつの『靖献遺言』―『遺言』と『講義』―

絅斎自ら記すところによると、『靖献遺言』は貞享元年（一六八四・絅斎三三歳）に着手し、四年の歳月をかけて貞享四年に脱稿。諸友の求めに応じて刊行された。刊行を終えて、元禄元年（一六八八）十月朔日から門生の為に『靖献遺言』の「講説」を始め、翌二年閏正月五日に講了。また、「講説」開始からやや遅れて、『靖献遺言』中の詳説すべき事項についての「講義」を同月某日に始め、同じく二年閏正月二八日に終了したと言う[3]。これら「講説」と「講義」の筆録がそれぞれ写本で門人の間に伝わったが、後者の「講義」のみ、絅斎没後の寛延元年（一七四八）に刊行された。こうして、『靖献遺言』に関しては、『靖献遺言』本書（以後『遺言』）と、それについて絅斎自身が講義した『靖献遺言講義』（以後『講義』）の二書が刊行されている[4]。

2、本稿で用いるテクスト

『遺言』は、貞享四年（一六八七）に脱稿し、元禄元年[5]に初版が刊行されたとみられているが、初版本は未発見で、伝存するのは全て改訂を経たものである。そのうち最も早期の刊が無窮会所蔵本（美濃版三冊・青表紙・無刊記）で、通行本（美濃版三冊・茶表紙・有刊記）と比較すると、同じ板木による印刷で、文字に摩滅が無く、印刷が鮮明、書物のたけ幅が豊か等から、無刊記本は絅斎の家蔵板本で、この板本に刊記「京師二條通衣棚・風月荘左衞門發行」を加えて風月堂が発売したものが有刊記の通行本と推定されている[6]。本稿では『遺言』については、この伝存する最も早期の刊本に拠っている近藤啓吾・金本正孝編『淺見絅齋集』（国書刊行会、一九八九年）所収テクストを底本とする[7]。『講義』についても同書所収テクストを底本とするが、こちらは影印ではなく、近藤が写本により校定したものである[8]。

3、書名『靖献遺言』に込めた意味

絅斎は『遺言』の跋文「書靖獻遺言後」でこう述べている[9]。

嗚呼、箕子已往矣、而其所以自靖自獻于先王者、萬古一心、彼此無閒如此。然則後之讀遺言者、所以驗其心、亦豈遠求也耶（嗚呼、箕子已に往けり。而して其の自ら靖んじ自ら先王に獻ずる所以の者、萬古一心、彼此閒（だて）無きこと此の如し。然らば則ち後の遺言を讀む者、其の心を驗する所以、亦た豈に遠く求めんや）。

ここに言う箕子云々は、殷が滅びようとする時、微子と箕子の間で交わされたとされる語「自靖人自獻于先王」を出典とする（『尚書』「商書」微子篇）。話者や字義の解釈などについては諸説あるが、いずれにせよ、国家存亡の危機に際してどう身を処すかという選択に当たって、各々が己の信じるところに従って誠を尽くすという大意に収まる。絅斎の門人に連なる谷秦山[10]が『靖献遺言』を説いて、下記のようにその意を補足している。

箕子ハ千歳以前ニ死ナレタガ、箕子ノ自靖自獻于先王ト云ハレタ詞ハ萬古忠臣ノ心デ、忠義ヲ盡シテ死ヌルト云フニカウ云フヨリ外ノ云ヒヤウハナイ。……日本ノ楠ガ此ニ字ノ旨ハ知ライデモ、アノ道ニ處シテ行ハレタナリハ、此ニ字ニヒシト合フ[11]。

「靖献」はつまるところ忠臣の心を意味し、和漢を問わず万古不

変のものであり、楠木正成が行ったことはまさにこの二字なのだと言う[12]。

4、『靖献遺言』の構成

全八巻。各巻一人を取り上げ、その人物の「遺言」に略伝を加え、諸家の評と関連する文を附載する。第一巻が屈原、次いで、諸葛亮、陶淵明、顔真卿、文天祥、謝枋得、劉因、方孝孺の計八人である。各巻の構成は、各人の事績とその人物が残した「遺言」にそれらの理解を助けるための資料を附載する形となっている。それらの具体的なあり方は、第三章で巻一について見るが、この構成の趣旨について、綱斎は前出の跋文冒頭でこう述べる。

古今忠臣義士、素定之規、臨絶之音、見乎衰頽危亂之時、而表于青史遺編之中者、昭昭矣。…閒竊纂其特著者、得八篇。…且稽其事蹟大略、紀諸本題之下、令其發于聲辭之各所以然者有以幷考焉。至其他一時同體之士可因而附見者、與先正格論有關于綱常之要、以及夫媮生忘義飾非求售、以欲欺天下後世者、又率得類推究覈、以屬卷後（古今の忠臣義士、素定の規、臨絶の音、衰頽危亂の時に見れて、青史遺編の中に表るるもの昭昭たり。…閒ろ竊にその特に著しきものを纂て八篇を得。…且つその事蹟の大略を稽へ、これを本題の下に紀し、其の聲辭に發するの各、然る所以の者をして以て幷せ考ふること有らしむ。其の他一時同體の士因りて附見すべき者と、先正の格論の、綱常の要に關ること有ると、以て夫の生を媮み義を忘れ、非を飾り售らんを求めて、以て天下後世を欺かんと欲する者に及ぶに至るまで、又率ね類推究覈して以て卷後に屬することを得）。

古今の「忠臣義士」の遺言の中から特に選び抜いた八篇に、その人物の事績の大略を本題の後（遺言の前）に記し、その遺言が発せられた所以を併せ考えられるようにした。更に参考となる他の同趣の人物の事績、大義に関わる先賢の論を附載するのみならず、「媮生忘義、飾非求售」という反面教師をも加えるのは、朱熹『楚辭後語』（以後『後語』）が揚雄「反離騒」を収録した上で、揚雄を手厳しく批判する序を冠するのに倣うものと思われる。

5、後世への影響と評価

1）幕末から近代における注目

明治以降、崎門派の尊王・国粋主義が明治維新をもたらす重要な原動力となったのだとする思潮があり、『遺言』は特にこの観点から注目されて来た。例えば、江戸中期の尊王論弾圧事件である宝暦事件（一七五八年）において、首謀者と目された竹内式部（一七一二―一七六八）は綱斎の高弟・強斎およびその弟子筋の教えを受けたとされており、堂上の公卿[13]に学を講じる際に『遺言』にも説き及んだという。宝暦事件の後、京都所司代が行った取り調べでは「四書五経にて事足り申すべきに、かゝるはげしき書」を講じたのはなぜか、と問いただしたといい、式部追放の罪三条の一項となった。幕府が『遺言』を警戒していたことが分かる[14]。

そして、『遺言』初版から約二百年、幕末に至ると『遺言』の刊行が急増する。元治元年（一八六四）には補刻版が、慶応元年（一八六五）には中型本が新刻され、明治維新後も明治二年、一三年と相次いで増刷された。更に、より小さな小型本も刊行され、近藤は明治一二年発行の四刻本を所蔵するという。補刻・新刻のみな

らず、携帯に便利な中小型本が登場して版を重ねており、その盛行ぶりが窺われる[15]。

『遺言』は幕末の志士の愛読書として夙に知られる。吉田松陰（一八三〇―一八五九）は国禁を犯しての海外渡航の企てに失敗して収監された野山獄[16]で「靖獻遺言を讀むに因りて作る」として書中の八人を題に一人一首を詠んでいる。第一首に屈原を詠む。

秦國情不測　秦國は情測られず
張儀多詭詞　張儀は詭詞多し
懷王聽不聰　懷王は聽聰ならず
上官逞忌猜　上官は忌猜逞し
内爲姦邪擾　内は姦邪に擾（みだ）され
外爲强敵窺　外は强敵に窺はる
國事日益非　國事は日益に非にして
愁思亂如絲　愁思は亂れて絲の如し
宗臣不得君　宗臣君を得ず
偸生尚爲誰　偸生尚ほ誰か爲にかせん
懷石沈汨羅　石を懷きて汨羅に沈む
汨羅千古悲[17]　汨羅千古に悲し

また、自身の心境を屈原に重ね合わせる次の詩も『遺言』が唯一全篇を収めている屈賦「漁父」の一句に拠っているところから、松陰の屈原や屈賦理解は『遺言』の影響が大きいのではないかと考えられる。

絲竹隣樓沸　絲竹　隣樓に沸く
孤囚対灯青　孤囚　灯青に対す
解釈屈子怨　解し釈（と）く屈子の怨
衆醉吾独醒[18]　衆は醉いて吾れ独り醒むと

次は、松陰の弟子に当たる高杉晋作（一八三九―一八六七）がやはり野山獄に囚われの身となった際に詠んだ詩である。

君不見死爲忠鬼菅相公　君見ずや死して忠鬼となる菅相公
靈魂尚存天拜峰　靈魂尚ほ存り天拜峰
又不見懷石投流楚屈平　又た見ずや石を懷きて流れに投ず楚の屈平
至今人悲汨羅江　今に至るも人は悲しむ汨羅の江
自古讒間害忠節　古より讒間忠節を害し
忠臣思君不懷躬　忠臣は君を思ひて躬（み）を懷（おも）はず
我亦貶謫幽囚士　我も亦た貶謫（へんたく）幽囚の士
憶[19]起二公涙沾胸　二公を憶（おも）ひ起せば涙は胸を沾（うるほ）す
休恨空爲讒間死　恨むを休（や）めよ空しく讒間の爲に死するを
自有後世議論公[20]　自ら後世議論の公（あからさま）なる有り
（元治元年四月二十五日　在野山獄）

屈原と菅原道真を共に讒に遭って左遷され不遇のうちに死した忠臣として詠み込み、自らの思いを託している。松陰の場合と異なり、『遺言』との関係を証するものは無いが、師が同じ獄中にあって『遺言』を愛読し、書中の八名に自らを投影した詩を詠んだことは胸中にあったのではないかと思われる。

一方、江戸幕府の重臣であった栗本鋤雲（一八二二―一八九七）は明治維新後も旧幕府の遺臣を以て任じた。栗本の「題淵明先生燈下讀書圖」は白髪の遺臣が『楚辭』を読む情景をうたう。

門苍蕭條夜色悲　　門苍蕭條として夜色悲し
鵂鶹聲在月前枝　　鵂鶹聲は在り月前の枝
誰憐孤帳寒縈下　　誰か憐れむ孤帳寒縈の下
白髪遺臣讀楚辭[21]　　白髪の遺臣、楚辭を讀む

他にも幕末から明治にかけて著された詩文には『遺言』の直接間接の影響を窺わせる表現が少なくない。例えば、西郷隆盛が沖永良部島での幽囚中に詠んだ詩も「離騒」に言及し、冤を訴える。

雨帯斜風叩敗紗　　雨は斜風を帯びて敗紗を叩き
子規啼血訴冤譁　　子規は血に啼き　冤を訴へて譁(かまびす)し
今宵吟誦離騒賦　　今宵吟誦す　離騒の賦
南竄愁懐百倍加[22]　　南竄(ざん)の愁懐　百倍加ふ

常に懐中に入れて持ち歩く[23]、獄中で心の支えとするといった彼らの『遺言』愛読の様子からは、『遺言』が時代の大転換期に社会変革運動に身を投じようとする青年たちの「励志」の書として機能したこと、また鋤雲の例からは書名の「靖献」に込めた意味は体制の転換期に遭遇し、遺臣として生きようとする選択をも支えたことが分かる。

2）近代以降の『靖献遺言』への関心と評価

幕末以来の流れを受けて、明治初期には『遺言』の注釈や続編が盛んに上梓されたが、洋学の盛行に伴い、次第に忘却される。だが、明治末年に至ると、『遺言』は再び注目を集め、注釈が続々と刊行された。日清戦争（明治二七年）、日露戦争（明治四二年）と対外戦争が相次ぐ時期である。こうした中で、明治四二年には絅斎に従四位が贈位され、四三年には浅見家墓地が修復されている。大正デモクラシーの時期には『遺言』は再び忘却されるが、昭和十年前後から再び盛行。近藤によると、この時期の近世思想史や国民道徳史といった書籍で絅斎に言及しないものはないと言う。敗戦ののち『遺言』は再び忘却される。或いは戦後の民主化の中では忌避された面があるかもしれない。戦後の『遺言』研究は、占領終了直後に僅かな研究が相次いで出た他は極めて乏しい。尊王・国粋主義で知られる絅斎とその代表作『遺言』についての関心は時勢との関係が強いことが見える。

二、『靖献遺言』編纂の思想

『靖献遺言講義』は上述したように絅斎による『遺言』講義の筆録であり、いわば撰者自身による解説書である。その冒頭には「靖獻遺言目錄」と題して開講の辞が収められている。絅斎は自ら『遺言』編纂の動機や目的を懇切に語っており、背景にある思想も自らの言葉で明確に語っている（以下、段落分けと見出しは筆者による）[24]。

編纂の動機

某竊ニ以(おも)爲ヘリ。古今聖賢ノ書、發明開示シテ、天下後世ヲ教ル所ノ者、至レリ盡セリ。今又別ニ書ヲアラハシ、愚鄙ノ辭ヲ以テ聖賢ノ跡ヲケガシ言コトヲ須(もち)ヒズ。然ルニ、今日此書ヲ編デ、以テ義ニ志シ學ヲ勉(つとむ)ルノ士ト共ニセント欲スル所ノ者ハ、道衰ヘ學廢(すた)レ、人倫之方明ラカナラズ、是ヲ以テ風俗日ニ漓(うす)ク、所謂聖賢之教ナルモノ、固ヨリ未だ嘗テ滅ビズト雖モ、能ク究知テ而實ニ蹈(ふむ)者アルコト鮮矣。忠孝之大節ニ至テハ、尤知而信ズル者難矣。而親ニ事ル者ハ、猶天性ノ恩愛ヲ以テ、甚*賊害之

罪ニ至ル者或ハ少シ。君ニ事ルニ至テハ、則其上下相維ギ、貴賤相持之躰、或ハ失ハザル者アリトイヘドモ、亂離反覆ノ際、君ヲ棄テ敵ニ降リ、恩ヲ忘レ義ニ背テ、而平日拜跽奔趨シテ、但後ニアランコトヲ恐ル、所ノ者、少シク念ヲ留ムルニ暇ナキ者、往々踵相屬、而其閒忠義自奮ヒ、命ヲ殞シ節ニ赴ク者アリトイヘドモ、君臣之大義ニ於テ、講磨錬達スル所、精シカラザレバ則心私ナシトイヘドモ、義ハ則悖而忠ニ失フ者皆是ナリ。

「此書ヲ編デ、以テ義ニ志シ學ヲ勉ルノ士ト共ニセント欲スル」のは何故か。それは「道衰ヘ学廃レ人倫ノ方不明」となり、聖賢の道を実際に生きる者が少なくなっているからである。「能ク究知テ而實ニ踏者」とは、通り一遍の知識ではなく、本当の意味で究め知っていて、自らの生身でそれを実践する、といった意味であろう。中でも「知而信ズル」（真の意味で理解し不動の姿勢を貫く）ことが難しいのが「忠孝ノ大節」だとする。崎門派では父子のみならず君臣の間も天合とするが、ここでは父子関係に比して君臣関係が人為的であることを実質的に認めてしまっており、父子に比して脆弱な君臣間の忠をゆるぎないものとするために「君臣之大義ニ於テ講磨錬達スル」、君臣の義を真の意味で究め知らしめようとするのだと言う。

収録した文の内容と趣旨

故ニ自古大義ニ明ニシテ、其尤著シキ者選擇シテ遂ニ八人ヲ得焉。……蓋空言ヲ以テ義理ヲ説ク、誠ニ其事歴ヲ擧テ之ヲ閲スル之尤親切ニシテ、感發興起餘リ有ルニ如カザル也。其事ヲ擧而之ヲ閲スルハ固ヨリ切也矣。然ルニ、其将ニ絶ヘントシテ自鳴ノ言ニ至テハ、則忠臣義士平生之蘊所、是ニ至テ肺肝心腸ヨリ流出シテ、聲氣ニ見ハル、者、眞ニ其風采心志、實ニ見而親接ルガ如クナル者、是ニ於テ得ベキ焉哉。因テ敬テ其遺言ヲ表シテ、以テ此編之骨子トス。且夫ノ事歴之的切ニシテ感發スベキ者ハ、採テ其前ニ錄シ、讀者ヲシテ幷考テ、以千歳之下萬里之遠、今日吾心之向フ所彼此之閒ナカラシメント欲ス。

「故ニ自古（古ヨリ）大義ニ明ニシテ其尤著シキ者（ヲ）選擇シテ遂ニ八人ヲ得タリ」。このため「忠孝ノ大節」について大義の明らかな歴史上の人物を選んだところ八人となった。大義を説くには「空言」（観念的な言葉）より「事歴」（実際の事績）の方が「親切」（身に迫って）「感発興起」（心を動かし奮い立たせる）ものである。中でも、その「将絶自鳴ノ言」（命を終えようとする時に発することば）は忠臣義士が平生から期するところが言葉となったものであるから、その人物の生前の風采や志を目の当たりに接するかのように感じさせてくれるものである[25]。

編纂の狙い

嗚呼。孰カ學ブコトヲ欲セザラン。既學矣、孰カ夫ノ義理ヲ知テ之ヲ踐ムコトヲ欲セザランヤ。但所謂大義ニ於テ、見ル處無レバ、則緩急之閒、惑テ且乖カザラント欲ストモ、而モ得ベカラズ。是則某此編ヲ輯ムル所以之本意ニシテ……

「孰カ學ブコトヲ欲セザラン」。誰もみな学ぶことを欲し、学んだからには義理を実践したいと願うものだが、大義を真に知っていないと、いざという時に正しくありたいと思っても本意に背くことをし

てしまうものだ。『遺言』編纂の動機はここにあると言う。

当時の儒学・儒者への批判

大抵吾國近世士タル者、率學ヲ好マズシテ、而儻學ヲスル者ハ、以テ記誦詞章之資トスルニ過ギズ。而英氣志氣アル者ハ、視テ學問讀書ヲ以テ事ニ益ナシトシテ、笑訕以之ヲ攘ク。殊テ知ラズ、學バザレバ大義ヲ辨フルコト能ハズ、夫ノ英氣志氣用ル所ヲ知ラズ。但是亦學ヲ倡ル者之誤而、其弊此ニ至ラシムルナリ。

吾国の近頃の士は学を好まず、まれに学問をする者があっても「記誦詞章之資」とするに過ぎず、「英氣志氣」ある者はそれを見て学問などというものは役に立たないと侮ってしまい、学ばなければ大義の何たるかが分からず、その「英氣志氣」も無駄になってしまうことを知らない。しかし、これは学者の誤りが招いた現象である。

絅斎が当時の儒学や儒者に抱いていた厳しい認識と憂慮が述べられ、そこからは己は真の学問を追求しているという強烈な自負も伺われる。

武士の小学として

故ニ此編特ニ士タル者ヲシテ大義ノ端的ヲ知而之ヲ切磨シ、學ニアラザレバ一歩モ其身ヲ動カスベカラズ、以テ君ニ事ヘ己ヲ處スル、皆幸ニ非ザレバ、妄ナルコトヲ識テ、疑ナカラシメントス。則此ヲ以テ武士之小學トスルモ亦可、而竊ニ稽古君臣ノ義ヲ明ラカニスルノ遺意ニ附スト云爾。（後略）

絅斎は最後に『遺言』の編纂意図と学問の目的に対する信念を述べ、朱子の『小学』に倣って、『遺言』を武士の小学として世に示すという抱負を述べる。

以上、絅斎は自らの学に対する考え、それを踏まえての『遺言』編纂の意図を実に直截に語っている。これらが具体的にどのような形を採るか、次章で見る。

三、『靖献遺言』巻之一「離騒懐沙賦」の構成と内容

上述の通り、『遺言』は各巻に一人を取り上げ、その人物の「遺言」に略伝を添え、諸家の評と関連する文を附載する。以下、屈原を取り上げる巻一について具体的にその構成と内容を見る。

1、巻一「離騒懐沙賦」の趣旨

『遺言』の解説書たる『講義』では各巻巻頭で当該巻の趣旨を述べる。巻一は巻頭であるため全巻についての言及もあるが、以下ではそれらは省略しつつ、巻一の趣旨を見ていく。

離騒者遭躁之義也。……此篇某特以懐沙賦爲遺言者、以其臨絶之音見於懐沙二字尤可見屈原本意。且以離騒二字而冠之者、以屈原之爲屈原皆從此二字發、故舉以爲全篇之主意要旨。懐沙特其究意耳（離騒は躁に遭ふの義なり。……此篇、某、特に懐沙賦を以て遺言となすは、其の臨絶の音、懐沙二字に見はれ、尤も屈原の本意を見るべきを以てなり。且つ離騒二字を以て之に冠するは、屈原の屈原たるは皆此の二字より發するを以て、故に挙げて以て全篇の主意要旨となす。懐沙は特に其の究意なるのみ）。

ここは巻一の題「離騒懐沙賦」について説く。絅斎は「懐沙」を死に臨んでの屈原の「遺言」と見て、巻一の核心に据えている。「離騒」

の二字を「懐沙」の前に冠するのは「屈原の屈原たるは皆此の二字より發する」からだとする。これは朱熹『楚辭集注』（以下『集注』）の観点と形式に倣うものと思われる。

朱子晩年、當君不明臣蔽上之時、而道已不行於天下、忠藎惻怛之誠不能自已焉。雖其出處之閒、固非屈原所能及、然至於夫純乎所天之至心、所遇之時與所踏之跡、則有不期而一致、感慨神會、實非淺淺士所能窺者。是以獨從容取楚辭解之。而至其微意則未嘗告人焉（朱子晩年、君は不明にして、臣は上を蔽ふの時に當たりて、道は已に天下に行はれず、忠藎惻怛の誠自ら已む能はざるなり。其の出處の閒、固より屈原の能く及ぶ所に非ずと雖も、然れども夫の天とする所に純なるの至心、遇ふ所の時、踏む所の跡とに至りては、則ち期せずして一致するあり。感慨神會、實に淺淺の士の能く窺ふ所に非ざるものなり。是を以て獨り從容として楚辭を取りて之を解す。其微意に至りては則ち未だ嘗て人に告げざるなり）。

ここでは、朱熹の楚辞注釈は、晩年の苦境の中でその境遇と心境が屈原と「期せずして一致」したためであると述べる。「天とする所」「其微意に至りては則ち未だ嘗て人に告げざるなり」等の表現は『集注』序の「所天者」（天とする所の者）「是豈易與俗人言哉」（是れ豈に俗人と言ひ易からんや）等を踏まえたものであろう。

2、巻一本文の内部構成

一方、『遺言』本文では、各巻は「遺言」、略伝、諸家の評および関連する文章の三部構成からなっていて、撰者は直接自説を述べない。これは師闇斎の表章の形式（先人の文章を挙げてその思想を顕彰するも自らは述べて作らず）を継ぐものと言える。しかし、選択した文を通して撰者の見解は強く出ており、絅斎が原拠文に加える改編（主に削除）も絅斎の編纂意図を雄弁に語る。本節では特に後者に留意して巻一を具体的に見る[26]。

以下には『遺言』本文と原拠文との違いを示す。別に説明がない限り、［ ］内は『遺言』による挿入、網掛けは『遺言』に無い部分、太字は原拠の書き換え、（ ）内は原拠の元の表現である。

① 屈原伝：（原拠）朱熹『楚辭集注』「離騷」序、『史記』屈原伝

ここでは、『遺言』本文が主に拠っている朱熹『集注』との違いを示す。傍線部は『史記』屈原伝を出典とする部分である。

離騷經者、屈原之所作也。**平字原**（↑屈原名平）、與楚同姓、仕於懷王、爲三閭大夫。三閭之職、掌王族三姓、曰昭屈景。**平**（↑屈原）序其譜屬、率其賢良、以厲國士。入則與**懷王**（↑王）圖議政事、決定嫌疑、出則監察羣下、應對諸侯。謀行職脩、懷王甚珍之。同列上官大夫及用事臣靳尚、妬害其能、**因**（↑共）譖毀之。**懷王**（↑王）疏**平**（↑屈原）。**平**（↑屈原）被讒、憂心煩亂、不知所愬、乃作離騷。上述唐虞三后之制、下序桀紂羿澆之敗、冀君覺悟、反於正道而還己也。是時、秦使張儀譎詐懷王、令絶齊交［楚大困、後儀復來楚、又厚幣用事臣靳尚、而設詭辯於懷王之寵姬鄭袖。懷王竟復釋去張儀。時平既疏、不復在位。使於齊、顧反、諫懷王曰、何不殺儀。懷王追儀、不及[27]。秦］又誘［懷王］與俱會武關。**平**（↑原）［又］諫懷王勿行。不聽而往、

遂爲所脅、與之俱歸、拘留不遣、卒客死於秦。而［子］襄王立、復用讒言、遷**平**（↑屈原）於江南。**平**（↑屈原）復作九歌、天問、九章［懐沙則其一也］、遠游、卜居、漁父等篇、冀伸己志、以悟君心、而終不見省。不忍見其宗國將遂危亡、遂赴汨羅之淵、［懐石］自沈而死（平、字は原。楚と同姓なり。懐王に仕へて三閭大夫となる。三閭の職は王族の三姓を掌る。曰く、昭・屈・景。平、其の譜屬を序で、其の賢良を率ゐて以て國士を厲まし、入りては則ち懐王と政事を圖議し嫌疑を決定し、出ては則ち羣下を監察し諸侯に應對し、謀行はれ職脩まる。懐王甚だこれを珍とす。同列の上官大夫其の能を妬害し、因て之を譖毀す。懐王、平を疏んず。平、讒を被り憂心煩亂、愬ふる所を知らず。乃ち離騒を作り、上は唐虞三后の制を述べ、下は桀紂羿澆の敗を序で、君の覚悟し正道に反りて己を還さんことを冀ふなり。是の時、秦、張儀をして懐王を譎詐せしめ、齊の交を絶たしむ。［楚、大いに困む。後、儀また楚に來り、また幣を事を用ふる臣靳尚に厚くし、詭弁を懐王の寵姫鄭袖に設く。懐王竟にまた張儀を釋し去る。時に平既に疏んぜられまた位に在らず。齊に使し、顧反して懐王を諫めて曰く、何ぞ儀を殺さざる、と。懐王、儀を追ふ。及ばず。秦、］また懐王を誘ひ與俱に武關に會す。平また懐王を諫め行くことなからしむ。聽かずして往き遂に脅すところとなり、これと俱に歸り拘留して遣らず。卒に秦に客死す。而して子襄王立ち、また讒言を用ひ、平を江南に遷す。平また九歌、天問、九章［懐沙は則ち其の一なり］、遠遊、卜居、漁夫等の篇を作り、己の志を伸べ以て君の心を悟らしめんことを冀ふ。而して終に省せられず。其の宗國の將に遂に危亡せんとするを見るに忍びず、遂に汨羅の淵に赴き、石を懐きて自ら沈んで死す）。

屈原の略伝について、絅斎は朱熹『集注』「離騒」序を基本とし、『史記』屈原伝に拠り若干の増補修正を加えている。但し、屈原について、『集注』が「原」と字を用いるのを逐一「平」と名に改めている。

② 屈原評1：（原拠）司馬遷『史記』屈原伝

［傳曰］屈平疾王聽之不聰也、讒諂之蔽明也、邪曲之害公也、方正之不容也、故憂愁幽思而作離騒。離騒者、猶離憂也。夫天者、人之始也。父母者、人之本也。人窮則反本、故勞苦倦極、未嘗不呼天也。疾痛慘怛、未嘗不呼父母也。屈平正道直行、竭忠盡智以事其君、讒人閒之、可謂窮矣。信而見疑、忠而被謗、能無怨乎。屈平之作離騒、蓋自怨生也。國風好色而不淫、小雅怨誹而不亂。若離騒者、可謂兼之矣。上稱帝嚳、下道齊桓、中述湯武、以刺世事。明道德之廣崇、治亂之條貫、靡不畢見。其文約、其辭微、其志絜、其行廉、其稱文小而其指極大、舉類邇而見義遠。其志絜、故其稱物芳。其行廉、故死而不容。自疏濯淖汙泥之中、蟬蛻於濁穢之中、以浮游塵埃之外、不獲世之滋垢、皭然泥而不滓者也。推此志也、雖與日月爭光可也（傳に曰く、夫れ天は人の始めなり。父母は人の本なり。人窮すれば則ち本に反る。故に勞苦倦極、未だ嘗て天を呼ばずんばあらず。疾痛慘怛、未だ嘗て父母を呼ばずんばあらず、と。屈平、道を正し行を直し忠を竭し智を盡し、以て其の君に事ふれども、讒人これを閒す。窮すと謂ふべし。其の志潔し。故に其の物を稱すること芳し。

其の行ひ廉なり。故に死して容れられず。濁穢の中に蟬蛻して、以て塵埃の外に浮游し、世の滋垢を獲ず。皭然として泥して滓されず。この志を推すに日月と光を爭ふと雖も可なり）。

略伝に続けて、絅斎は『史記』「屈原伝」から司馬遷の評語を引く。原拠の書き換えは無いが、削除は多い（網掛け部分）。削除部分には、「疾王聽之不聰也」（王聽の聰ならざるを疾（にく）む）「能無怨乎。屈平之作離騒、蓋自怨生也」（能く怨むる無からんや。屈平の離騒を作る、蓋し怨みより生ずるなり）等、君上の不明を不満に思うことを是認する語が含まれる。また「國風好色而不淫、小雅怨誹而不亂」（國風は色を好めども淫せず、小雅は怨誹すれども亂せず）と、『詩経』になぞらえて「離騒」を評価する箇所も「好色」（色を好む）「怨誹」（うらみそしる）に対して許容的であることが削除の原因であろう。「上稱帝嚳、下道齊桓」（上は帝嚳を稱し、下は齊桓を道ふ）はそこまでは良いのかも知れないが、「中述湯武」（中ごろは湯武を述べ）と湯武が登場し、「以刺世事」（以て世事を刺（そし）る）と続き、湯王武王の事績を以て風刺を行うことを肯定していることから、引用の便からの単なる割愛ではなく、湯武革命を君臣の義に反するものとして強く非難する絅斎による明確な意図を以ての削除と考えられる[28]。こうした削除を経た文は、父子と共に君臣関係も天合とし、些かの揺らぎも無い忠を尽くすこと、一点の汚れもない清さを人格に求める絅斎の思想と見事に合致する。

③ 屈原評2：（原拠）朱熹『楚辭集注』前序

［朱子曰］原之爲人、其志行雖或過於中庸而不可以爲法、然皆出於忠君愛國之誠心。原之爲書、其辭旨雖或流於跌宕怪神怨懟激發、而不可以爲訓、然皆生於繾綣惻怛、不能自已之至意。雖其不知學於北方、以求周公仲尼之道、而獨馳騁於變風變雅之末流、以故醇儒莊士或羞稱之、然使世之放臣屏子怨妻去婦抆淚謳唫於下、而所天者幸而聽之、則於彼此之閒、天性民彝之善、豈不足以交有所發、而增夫三綱五典之重。此予之所以每有味於其言、而不敢直以詞人之賦視之也（朱子曰く、原の人たる、其の志行或は中庸に過ぎて以て法と爲すべからずと雖も、然れども皆な君に忠し國を愛するの誠心に出づ。原の書たる、其の辭旨或は跌宕怪神怨懟激發に流れて、以て訓と爲すべからずと雖も、然れども皆な繾綣惻怛、自ら已む能はざるの至意に生ず。其の北方に學んで以て周公仲尼の道を求むることを知らずして、獨り變風變雅の末流に馳騁す。故を以て醇儒莊士或はこれを稱するを羞づると雖も、然れども世の放臣屏子怨妻去婦をして下において汶淚唫謳して、天とする所の者をして幸にしてこれを聽かしめば、則ち彼比の閒、天性民彝の善において、豈にこもごも發する所ありて、夫の三綱五典の重を増すに足らざらん。此れ予の毎に其の言に味ふありて、敢て直に詞人の賦を以てこれを視ざる所以なり、と）。

中国の屈原観に多大な影響を与えた有名な文である。絅斎は導入の語を加える他は省略も加筆もせず、全く手を加えない。原文が「原の人たる」と字を用いる箇所も名に改めていない[29]。

④ 遺言「懐沙」乱辞

浩浩沅湘、分流汨兮。脩路幽蔽、道遠忽兮。曾傷爰哀、永嘆喟兮。世溷濁莫吾知、人心不可謂兮。懷質抱情、獨無匹兮。伯樂既沒、

驥焉程兮。民生稟命、各有所錯兮。定心廣志、余何畏懼兮。知死不可讓、願勿愛兮。明告君子、吾將以爲類兮（浩浩たる沅湘、分流して汨たり。脩路幽蔽し、道遠忽たり。曾て傷み爰に哀しみ、永く嘆喟す。世溷濁し、吾を知るなし。人心謂ふべからず。質を懐き情を抱きて、獨り匹なし。伯樂既に没す。驥焉んぞ程らん。民生、命を稟け、おのおの錯く所あり。心を定め志を廣めば、余何ぞ畏懼せん。死の讓るべからざるを知る。願くは愛むなからん。明かに君子に告ぐ、吾將に以て類とならんとす、と）。

朱熹『集注』所収のテキストと同文であるが、絅斎は朱説に従って文の一部（傍線部）の順序を改訂している[30]。朱熹の学説に対する尊崇を示すものと言える。

⑤「漁父」辞：全文を収録。朱熹『集注』所収テキストと同文である。

⑥ 朱熹の揚雄「反離騒」序：（原拠）『楚辭後語』

［朱子又叙反離騒曰］反離騒者、漢給事黄門郎［句］新莽諸吏中散大夫揚雄之所作也。雄少好詞賦、慕司馬相如之作以爲式。又怪屈原文過相如、至不容、作離騒、自投江而死。悲其文、讀之未嘗不流涕也。以爲君子得時則大行、不得則龍蛇、遇不遇命也、何必湛身哉。迺作書、往往摭離騒文而反之、自岷山投諸江流、以吊屈原云。始雄好學博覧、恬於勢利、仕漢三世不徙官、然王莽爲安漢公時、雄作法言、已稱其美、比伊尹、周公。及莽簒漢、竊帝號、雄遂臣之、以耆老久次轉爲大夫。又放相如封禪文、獻劇秦美新以媚莽意、得校書天祿閣上。會劉尋［按漢書尋當作棻］等以作符命爲莽所誅、辭連及雄、使者來欲收之、雄恐懼、從閣上自投下、幾死。先是、雄作解嘲、有爰清爰静、游神之廷、惟寂惟寞、守德之宅之語。至是京師爲之語曰、爰清静、作符命、唯寂寞、自投閣。雄因病免、既復召爲大夫、竟死莽朝。其出處大致本末如此、豈其所謂龍蛇者邪。然則雄固爲屈原之罪人、而此文乃離騒之讒賊矣、它尚何説哉（朱子また「反離騒」に叙して曰く、「反離騒」は漢の給事黄門郎［句］新莽が諸吏中散大夫、楊雄の作る所なり。雄、少くして詩賦を好み司馬相如の作を慕ひて以て式とす。また屈原の文、相如に過ぎ、容れられざるに至り「離騒」を作り自ら江に投じて死するを怪しみ、其の文を悲しみ、これを讀みて未だ嘗て涕を流さずんばあらざるなり。以爲へらく、君子時を得れば則ち大いに行ひ、得ざれば則ち龍蛇す。遇不遇は命なり。何ぞ必しも身を湛へんや、と。迺ち書を作り、往往「離騒」の文を摭ひてこれを反し、岷山よりこれを江流に投じて、以て屈原を弔ふと云ふ。始め雄、學を好んで博覧、勢利に恬なり。漢に仕へ三世、官を徙さず。然るに王莽が安漢公となる時、雄『法言』を作り、已に其の美を稱し、伊尹周公に比し、莽、漢を簒ひ帝號を竊むに及んで、雄、遂にこれに臣たり。耆老久次を以て転じて大夫となり、また相如が「封禪文」に放ひ、「劇秦美新」を獻じて以て莽が意に媚び、書を天禄閣の上に校することを得たり。劉尋［『漢書』を按ずるに尋はまさに棻に作るべし］ら符命を作るを以て、莽が誅する所となるに會ふ。辭連ねて雄に及ぶ。使者來たりてこれを収めんと欲す。雄、恐懼し閣上より自ら投下し、幾んど死す。これより先、雄「解嘲」を作り、爰に清、爰に静、神の廷に遊ぶ。惟だ寂、惟だ寞、德の宅を守るの語あり。ここに至りて京師これ

が語をなして曰く、爰に清靜、符命を作り、唯だ寂寞、自ら閣より投ず、と。雄因りて病免す。既にしてまた召されて大夫となり竟に莽が朝に死す。其の出處の大致本末此の如し。豈に其れ謂ふ所の龍蛇なる者か。然れば則ち雄固より屈原の罪人たりて、この文は乃ち「離騷」の讒賊なり。它になほ何をか説かんや、と）。

ここでは、朱熹が『後語』に収めた揚雄「反離騷」に附した序文の全文を基本的には忠実に採録しているが、ただ一点、漢朝と新朝での官職名の間に朱熹序には無い「句」の一字を小字で挿入する。『遺言』にも『講義』にも絅斎がその意図を述べる語は見えないが、揚雄が二主に仕えたことを強調するためと見る説がある[31]。また、『後語』が劉歆の子の名を「劉尋」とするのをそのまま引用しながらも、『漢書』に拠れば「尋」ではなく「棻」とすべきと割注を入れている。絅斎が『遺言』執筆に当たって精密な作業をしていること、朱熹を尊崇する姿勢は強いが盲従ではない学究姿勢も見える。

⑦ 司馬光の龔勝評：（原拠）『性理大全』巻六一、歴代三、西漢、龔勝

司馬光（↑涑水司馬氏）曰、王莽慕**龔勝**（↑君賓）之名、沐以尊爵厚禄劫以淫威重勢而必致之。**勝**（↑君賓）不勝逼迫、絶食而死（司馬光曰く、王莽、龔勝の名を慕ひ、沐するに尊爵厚禄を以てし、劫（おびやか）すに淫威重勢を以てして、必ずこれを致さんとす。勝、逼迫に勝へず、食を絶ちて死す）。

絅斎はここでも字を逐一名に改めている。

⑧（割注1）龔勝の伝：（原拠）『漢書』巻七二「王貢兩龔鮑傳」或いは『資治通鑑綱目』巻八上「莽迎龔勝爲太子師友祭酒勝不食而卒」

以下は『遺言』テキストである。［　］で示すのは『漢書』『綱目』いずれにも見られない部分である。

［漢龔勝以］名節［直言］著。會哀帝崩、［王］莽秉政、乞骸骨、歸［老］鄉里。［及］莽既簒國、遣使者卽拜勝爲講學祭酒。勝稱疾不應。後、莽復遣使者迎勝。使者與郡太守官屬諸生千人以上、入勝里致詔。使者欲令勝起迎、勝稱病篤。使者入謂勝曰、聖朝待君爲政。勝對曰、命在朝夕、上道必死、無益萬分。使者至以印綬就加勝身、勝輒推不受。使者爲勝子及門人等言、朝廷虛心待君、以茅土之封。雖疾病宜動移至傳舍、示有行意。必爲子孫遺大業。門人等白使者語。勝曰、吾受漢家厚恩。無以報、今年老矣、旦暮入地。誼豈以一身事二姓、下見故主哉。因敕以棺斂喪事、衣周於身、棺周於衣、勿隨俗。語畢、遂不復開口飲食、積十四日死。時七十九矣（漢の龔勝、名節直言を以て著る。哀帝崩じ王莽政を秉るに會ひ、骸骨を乞ひ鄉里に歸老す。莽既に國を簒ふに及び、使者を遣し卽ち勝を拜し講學祭酒となす。勝、疾と稱して應ぜず。後、莽また使者を遣し勝を迎ふ。使者、郡太守・官屬・諸生千人以上と勝の里に入り、詔を致す。使者、勝をして起迎へしめんと欲す。勝、病篤しと稱す。使者、入りて勝に謂ひて曰く、聖朝君を待ちて政をなさんとす、と。勝對へて曰く、命朝夕にあり、道に上らば必ず死せん。萬分に益なし、と。使者印綬を以て就きて勝の身に加ふるに至る。勝輒ち推して受けず。使者、勝が子および門人らの爲に言ふ、朝廷、心を

虚しくして君を待つに茅土の封を以てす。疾病と雖も宜しく動移して傳舎に至り、行意あるを示すべし。必ず子孫の爲に大業を遺さん、と。門人ら使者の語を白す。勝曰く、吾れ漢家の厚恩を受く。以て報ずるなく、いま年老い、旦暮地に入らん。誼、豈に一身を以て二姓に事へ、下に故主を見んや、と。因りて勅するに棺斂喪事を以てし、衣は身に周らし、棺は衣を周らし、俗に随ふなかれ、と。語畢りて、遂にまた口を開きて飲食せず、十四日を積みて死す。時に七十九）。

このように若干の繋ぎの語以外は『漢書』『綱目』と重なる。二書は細部に異同はあるものの概ね重複しており、出典はどちらからと断じ難い。

⑦（続き）

班固以薫膏之語譏焉（班固、薫膏の語を以て譏る）。

綱斎はここに次の割注⑨を入れている。『漢書』では⑧に続けて『綱目』には無い龔勝の葬儀の記述があり、⑨のエピソードが登場する。⑧で見たように、ほぼ同文の『漢書』『綱目』の龔勝伝において、唯一最大の相違点である。班固がこの老父の言を龔勝伝の最後に附しているのは、龔勝が守節のために自死したことを譏るものであると司馬光は言う。

⑨（割注2）龔勝の伝末：（原拠）『漢書』巻七二「王貢兩龔鮑傳」

［漢書龔勝傳末云］有老父來弔、哭甚哀、既而曰、嗟虖、薫以香自燒、膏以明自銷。龔生竟夭天年、非吾徒也。遂趨而出、莫知其誰（『漢書』龔勝傳末に云ふ、老父あり、來りて弔ひ、哭すること甚だ哀し。既にして曰く、嗟虖、薫は香を以て自ら燒け、膏は明を以て自ら銷ゆ。龔生竟に天年を夭す。吾が徒にあらざるなり、と。遂に趨りて出で、其の誰たるかを知るなし）。

以上、導入言を加える他は、引用部分は『漢書』の原文通りである。「吾が徒にあらざるなり」と言い捨てて去ったというのであるから、老父が龔勝の選択を否定していることは確かである。

⑦（続き）

未聞有爲辨之者也。可不大哀歟。昔者紂爲不道毒痡四海。武王不忍天下困窮而征之。斯則有道天子誅一亂政之匹夫爾。於何不可。而伯夷叔齊深非之。義不食周粟而餓死。狷隘如此。仲尼猶稱之曰仁、以爲不殞其節而已。況於王莽憑漢累世之恩、因其繼嗣衰絶、飾詐偽而盗之。又欲誣涜清士、以其臭腐之爵禄、甘言諛禮、期於必致。不可以智免、不可以義讓、則志行之士、舍死何以全其道哉。或者謂其不能黜芳棄明、保其天年。然則虎豹之鞹、何以異於犬羊之鞹。庸人之行、孰不如此。又責其不詭辭曲對、若薛方然（未だ爲にこれを辨ずるあるを聞かず。大いに哀しまざるべけんや。昔、紂不道をなし四海を毒痡す。武王、天下の困窮に忍びずしてこれを征す。而るに伯夷叔齊深くこれを非とし、義、周の粟を食はずして餓死す。仲尼猶ほこれを稱して仁と曰ふは、以て其の節を殞さずとなすのみ。況んや、王莽、漢の累世の恩に憑り、其の繼嗣衰絶に因て、詐偽を飾りてこれを盗み、また清士を誣涜するに、其の臭腐の爵禄を以てせんと欲し、甘言諛禮必致に期し、智を以て免るべからず、義を以て讓るべからざるにおいてをや、則ち志行の士、死を舍て何を以て其の道を全くせんや。或者、其の芳を黜け明を棄て、其の天年

を保つこと能はざりしを謂ふ。然らば則ち虎豹の鞹、何を以て犬羊の鞹に異ならん。庸人の行ひ、孰れか此の如くならざらん。また其の詭辭曲對、薛方が若く然らざるを責む）。

龔勝が守節のために自死したことを班固が非難したことへの司馬光の反論である。絅斎がこの文を採用した眼目はここにあると思われるが、ここでも僅かに刪除を加えており（網掛け部分）、司馬光との立場の違いが鮮明に出ている。原文の文脈では、紂の不道に天下が苦しむのを見かねて、武王は（主君である）紂を討った。「そうであれば、有道の天子が無道の匹夫を成敗したに過ぎず、何の問題があろうか」。それを伯夷叔斉が受け入れず、不義であると考えた周の食物を拒んで餓死した。「すいぶん頑なである」。それでも、孔子が仁として称えたのは節を守った点を見てのことである。それに引き換え王莽は…と、武王が有道の天子であるのに対し、王莽が紛れもなく無道であることを言い、龔勝はそれに臣従することを逃れる術が無く、死を選ばざるを得なかったのである、と自死を非難する論に反駁している。これに対し、絅斎は括弧部分を刪除し、湯武革命を否定し、それを断固として非難した伯夷叔齊を称揚する立場を貫徹している。

⑩（割注3）薛方の伝：（原拠）『漢書』巻七二「王貢兩龔鮑傳」

［漢末］自成帝至王莽時、清名之士、琅邪又有紀逡王思、齊**有**（↑則）薛方子容、太原則郇越臣仲、郇相稚賓、沛郡則唐林子高、唐尊伯高、皆以明經飭行顯名於世。……薛方嘗爲郡掾祭酒、嘗徵不至、及莽［簒國］以安車迎方、方因使者辭謝曰、堯舜在上、下有巢由、今明主方隆唐虞之德、小臣欲守箕山之節也。使者以聞、莽說其言、不強致。方居家以經教授、喜屬文、著詩賦數十篇（漢末の清名の士、齊に薛方あり。莽、國を簒ふに及びて、安車を以て方を迎ふ。方、辭謝して曰く、堯舜上にありて下に巢由あり。いま明主はまさに唐虞の德を隆くす。小臣は箕山の節を守らんと欲するなり、と。使者以聞す。莽其の言を説びて強いて致さず、と）。

ここは上掲⑦末尾の「責其不詭辭曲對、若薛方然」（其の詭辭曲對、薛方が若く然らざるを責む）を受けて、薛方が行った「詭辭曲對」（詭弁を弄した処世術）について解説しており、薛方以外についての叙述は大幅に削減する一方、王莽が登場する箇所には「簒國」（国をうばう）の一語を挿入している。

⑦（続き）

然則將未免於諂。豈曰能賢。故**勝**（↑君賓）遭遇無道及此窮矣。失節之徒（然らば則ちまさに未だ諂に免れざらんとす。豈に能く賢と曰はんや。故に勝、無道に遭遇する、此に及びて窮れり。節を失ふの徒）

⑪（割注4）

指班固也。漢賓憲以外戚專權。後遂謀逆、和帝誅之。固以爲憲客亦死獄中（班固を指すなり。漢の賓憲、外戚を以て權を專らにす。後ち遂に逆を謀りて、和帝これを誅す。固、憲の客たるを以て亦た獄中に死す）。

この割注は絅斎自らの文と思われる。班固が謀逆の罪に連座して獄死したことを指摘して、龔勝の守節を謗った班固が実は失の徒であ

ると言う。

⑦（続き）

排毀忠正、以遂己非。不察者又從而和之。太史公稱、伯夷叔齊不有孔子、則西山之餓夫、誰識知之。信矣哉（忠正を排毀して以て己が非を遂げ、察せざる者また従ひてこれに和す。太史公稱す、伯夷叔斉も、孔子あらざれば則ち西山の餓夫にして、誰かこれを識知せん、と。信なるかな）。

ここで長く続いた司馬光の襲勝評引用が終わる。「失節の徒が守節の士を非難して己を正当化しようとし、道理をわきまえない者たちが安易に同調してしまう。司馬遷が伯夷叔斉も孔子にその徳を見出されなければ、ただ餓死するのみで誰がその真価を知ろうか、と言ったのはまさに至言である」と言う。守節の士への非難とそれへの世論の安易な同調への、司馬光の嘆きと憤りの辞を絅斎は一字一句も手を加えず引用し、全面的賛同を示す。

⑫ 朱熹の守節論：（原拠）『朱子語類』「論語十七」「泰伯篇」「曾子曰可以託六尺之孤」

［朱子曰］今世人多道、東漢名節無補於事。某謂三代而下、惟東漢人才、大義根於其心、不顧利害、生死不變、其節自是可保。未說公卿大臣、且如當時郡守懲治宦官之親黨、雖前者既爲所治、而來者復蹈其迹、誅殛竄戮、項背相望、略無所創。今士大夫顧惜畏懼、何望其如此。平居暇日琢磨淬厲、緩急之際、尚不免於退縮。況遊談聚議、習爲軟熟、卒然有警、何以得其伏節死義乎。大抵不顧義理、只計較利害、皆奴婢之態、殊可鄙厭（朱子曰く、今の世人多く道ふ、東漢の名節、事に補ふなし、と。某謂ふ、三代より下、惟だ東漢の人才、大義其の心に根ざし、利害を顧みず、生死も變せず。其の節自ら是れ保つべし。未だ公卿大臣を説かず、且つ當時の郡守、宦官の親黨を懲治するが如し。前なる者既に治する所となると雖も、来たる者また其の迹を蹈み、誅殛竄戮、項背相望み、略ぼ創る所なし。いま士大夫、顧惜畏懼して、何ぞ其の此の如きを望まん。平居暇日、琢磨淬厲して、緩急の際、尚ほ退縮を免れず。況んや游談聚議、習ひて軟熟をなし、卒然警あれば、何を以て其の節に仗り義に死することを得んや。大抵は義理を顧りみず、只だ利害を計較するのみ。皆な奴婢の態にして殊に鄙厭すべし、と）。

後漢の名節の士など何の役にも立たなかった、と世間が評しているとしての朱熹の反論。彼らを「大義其の心に根ざし、利害を顧みず、生死も變せず」と評し、今の士大夫には望むべくもない、平素から鍛錬していても、いざという時には怯んでしまうもの、まして常日頃弛んでいるようではにわかに一大事あれば、どうして（後漢の名節のように）「節に仗り義に死する」ことが出来ようか。多くは利害にかまけて、義理をかなぐり捨ててしまう」とし、卑しい奴婢の態度であると断罪する。絅斎は朱子の説に一切手を加えておらず、全面的賛同を示す。

⑬ 朱熹の失節論：（原拠）『朱子文集』巻三五「答劉子澄」

［又曰］荀淑、正言於梁氏用事之日（又た曰く、荀淑、梁氏の事を用ひるの日に正言して）

⑭（割注1）荀淑の伝：（原拠）『後漢書』巻六二「荀韓鍾陳列傳」

荀淑が朝廷で権勢を振るう外戚を批判して疎まれ、官を辞すまでの

経緯を補っている。

⑬（続き）

而其子爽已濡跡於董卓專命之朝（而して其の子爽、已に跡を董卓命を專らにするの朝に濡す）。

⑮（割注2）范曄の荀爽評：（原拠）⑭列伝の論賛

［范曄曰］及董卓當朝、爽及鄭玄、申屠蟠、俱以處士召[32]。蟠玄竟不屈以全其高。爽已黄髪矣、獨至焉、未十旬而取卿相。意者疑其乖趨舍。余竊商其情、以爲出處君子之大致也、平運則弘道以求志、陵夷則濡跡以匡時［乎］。荀公之急急自勵、其濡跡乎。不然［則］何爲違貞吉而履虎尾焉。觀其遜言遷都之議、以救楊、黄之禍。及後潛圖董氏、幾振國命、所謂大直若屈、道固逶迤也（范曄曰く、董卓の朝に當るに及びて、爽および鄭玄・申屠蟠、俱に處士を以て召さる。蟠・玄、竟に屈せずして以て其の高を全す。爽、已に黄髪なり。獨り至る。未だ十旬ならずして卿相を取る。意ふ者は、其の趨舍に乖くを疑ふ。余は竊かに其の情を商りて以爲らく、跡を濡し以て時を匡せるか。然らずんば則ちなんすれぞ貞吉に違ひて虎尾を履める、と）。

削除部分から范曄の「大直若屈」（大直は屈するが若し）説に絅斎が賛同しないことが分かる。

⑬（続き）

及其孫彧、則遂爲唐衡之壻、曹操之臣、而不知以爲非矣（其の孫彧に及びては、則ち遂に唐衡の壻、曹操の臣となりて、以て非となすを知らず）。

⑯（割注3）荀彧の伝：（原拠）『後漢書』巻七十「鄭孔荀列傳」

［彧爽兄緄之子也。］荀彧字文若、潁川潁陰人、朗陵令淑之孫也。父緄爲濟南相。緄畏憚宦官、乃爲彧娶中常侍唐衡女。彧以少有才名、故得免於譏議。南陽何顒名知人、見彧而異之、曰、王佐才也。［後爲曹操謀主而死。中常侍、宦者官名。朱子又於答尤延之及潘叔昌書詳斷彧失身之本末矣］（彧は爽の兄緄の子なり。緄は宦官を畏憚して乃ち彧の爲に中常侍唐衡の女を娶り、後に曹操の謀主となりて死す。中常侍は宦者の官名。朱子また尤延之および潘叔昌に答ふる書において詳かに彧の失身の本末を斷ず。）。

ここでは『後漢書』中の荀彧を評価する部分を削除した上で、絅斎が失節と考える二件の事柄を付け加え、更に朱熹に荀彧の失節を批判する文があることを指摘する[33]。

⑬（続き）

蓋剛大直方之氣、折於凶虐之餘、而漸圖所以全身就事之計。故不覺其淪胥而至此耳。想其當時父兄師友之間、亦自有一種議論、文飾蓋覆、使驟而聽之者、不覺其爲非而眞以爲是、必有深謀奇計、可以治國救民於萬分有一之中也。邪説横流、所以甚於洪水猛獸之害、孟子豈欺予哉（蓋し剛大直方の氣、凶虐の餘に折れて、漸く身を全くし事を就す所以の計を圖る。故に其の淪胥して此に至るを覺らざるのみ。想ふに、其の當時、父兄師友の間、亦た自ら一種の議論、文飾蓋覆して、驟にこれを聽く者をして其の非たるを覺らずして、眞に以て是れ必ず深謀奇計、以て萬分有一の中に國を治め民を救ふべきものありと爲さしむるあらんと。邪説横流、洪水猛獸の害より甚しき所以、孟子豈に予を欺

かんや）。

絅斎は一見道理があるように見えて、その実は詭弁によって失節を正当化する「邪説横流」の害を警戒する朱熹の言を一切手を加えずに引用し、完全な賛同を示す。

⑰ 黄榦の守節論：（原拠）『性理大全』巻六二・歴代四・東漢・陳寔

黄榦[34]（↑勉齋黄氏）曰、陳太丘送張讓［宦者名］父之喪。人以爲善類頼以全活者甚衆。前輩亦以爲、太丘道廣。嘗竊疑之。如此則枉尺直尋而可爲歟。士君子行己立身、自有法度、有義有命。豈宜以爲法。天地如此其廣、古今如此其遠、人物如此其衆。便使東漢善類盡爲宦官所殺、世亦曷嘗無善類哉。若使是眞丈夫又豈畏宦官之禍而藉太丘如此之屈辱、以全其身哉。吾人於此等處、直須見得分明、不然未有不墮坑落塹者也（黄榦曰く、陳太丘、張讓［宦官の名］が父の喪を送る。人以て善類の頼りて以て全活する者甚だ衆となす。前輩も亦た以て太丘は道廣しとなす。嘗て竊かにこれを疑ふ。此の如くなれば則ち尺を枉げ尋を直くして、而もなすべきか、と。士君子、己を行ひ身を立つる、自ら法度あり、義あり命あり。豈に宜しく以て法となすべけんや。天地此の如く其れ廣く、古今此の如く其れ遠く、人物此の如く其れ衆し。便ち東漢の善類をして盡く宦官の殺す所とならしむるとも、世亦た曷ぞ嘗て善類無からんや。若し是れ眞丈夫ならしめば、又た豈に宦官の禍を畏れて、太丘此の如くの屈辱に藉りて、以て其の身を全くせんや。吾人此等の處において直ちに須く見得て分明なるべし。然らずんば、未だ坑に墮ち塹に落ちざる者あらざるなり）。

ここでも、朱熹の娘婿であり、『朱子行状』撰者である黄榦の守節についての警句を基本的に手を加えずに引用し、完全な賛同を示す。唯一手を加えているのが、宦官であることを示す注記であるのも絅斎の思想を強く表している。

3、巻一に現れる絅斎の学の特徴

以上、巻一は、朱熹『集注』所載の屈原賦に『集注』から朱熹の序と屈原の伝を冠し、守節をめぐる朱熹の論とそれを支える資料を加えたものとなっているが、そこからは絅斎の学の特徴が強く見えて来る。

1）朱熹尊崇

(1) 朱熹の学（および朱子学）に依拠

巻一に収録される文は朱熹『楚辭集注』『楚辭後語』を主な出典とし、加えられる割注も人物の伝記資料を史書に頼る他は『朱子語類』『朱子文集』『性理大全』と朱子学の文献を出典としている[35]。

(2) 基本的には朱熹の文には手を加えない。

『楚辭集注』『楚辭後語』『朱子語類』『朱子文集』から長尺の引用を行っているが、「朱子曰」といった最小限の導入の語を加える他は、省略も加筆もせず、全く手を加えない。

(3) 朱説に従う。或いは倣う。

朱説に従っての改編の例としては、遺言「懐沙」乱辞について（字句は『集注』の通りであるが）朱説に従って一部の前後を入れ替えている。朱説に倣う例としては、揚雄「反離騒」への朱熹序全文を

収めるのは、『後語』序に言う「以明天下之大戒也」（以て天下の大戒を明かにする也）の意に倣うものであろう。

(4) とはいえ盲従はしない。

⑥揚雄「反離騒」朱熹序の劉歆の子の名の例では、朱熹の原文を一応そのまま引きながらも原文の誤りを割注で指摘している。絅斎が『遺言』執筆に当たって精密な作業をしていること、朱熹を尊崇する姿勢は強いが盲従ではない学究姿勢を有することが分かる。

2）崎門派の思想的特徴が色濃い。

つまり、忠（君臣の大義）および守節を重視する姿勢が突出している。

(1) 朱熹の文にも敢えて手を加えて、大義を貫徹する。

朱熹尊崇を特徴とする『遺言』であるが、大義に関われば、朱熹の文にも敢えて手を加えて、大義を貫徹しようとする。原理原則に拘る崎門派らしいと言える。主な例を二点挙げる。

まず、字を名に変更する点。屈原について、『集注』が「原」と字を用いるのを『遺言』は逐一「平」と名に改めている。その理由について、『遺言』本文でも『講義』でも絅斎は何も語っていないが、既に見たように、他の引用文でも全て同様に字を逐一名に改めており[36]、『遺言』全巻において孔孟程朱の四人以外には全て名を用いている[37]。朱子学者としての姿勢であることは確かであろう[38]。

次に、原文に無い字句を挿入する点。⑥朱熹『楚辭後語』揚雄「反離騒」序の引用において、冒頭の漢朝と新朝での官職名の間に原文には無い「句」の一字を小字で挿入している。これについても『遺言』にも『講義』にも絅斎がその意図を述べる語は見えないが、絅斎が正統王朝とみなす漢朝への出仕と簒奪王朝とみなす王莽の新朝への出仕とを同列に扱うことを嫌い、この二朝を峻別するためと見て、ほぼ間違い無いだろう。

(2) 朱熹の文以外に加える改編に見える思想的特徴

朱熹の文への改編は抑制的であるのに対して、それ以外の文には大幅な改編も加えられている。これらの改編は雄弁に絅斎の思想を語る。主な二点を指摘する。

まず、削除である。②の司馬遷による屈原評や⑮范曄の荀爽評で見たように、自説と異なる言辞は執拗なほど徹底して削除し、自説を貫徹している。

次は、挿入である。絅斎は本文のみならず、本文に加える割注でさえも基本的に引用によっており、自らが文を書き加えることは極力避けているが、自身で語を書き加えている箇所が巻一では三箇所ある。これらの僅かな例外は絅斎の強い拘りが現れたものと見ることが出来る。一例目は⑰陳太丘についての黄榦の評において「宦官」と割注を挿入、二例目は⑩薛方の伝において「簒國」の一語を挿入、三例目は⑪司馬光による龔勝評に割注して、班固が謀逆の罪に連座して獄死したことを指摘している。これら削除と挿入という正反対の方向性からの改編は、しかし君臣の大義を明らかにするという点で軌を一にしている。

むすびに

最後に、肝心の屈原観であるが、『遺言』における屈原は、忠（君臣の大義）と守節という絅斎が最も重視する価値を擬人化した象徴

であると言える。屈原という人物の実像についての関心や辞賦自体への関心は少なくとも『遺言』には現れていない。それは、遺言として挙げられるのが辞賦本体ではなく乱辞であり、「離騒」も篇名が登場するだけであること等、巻一の内容と構成に明らかである。では、絅斎は屈原という象徴によって、どのような守節観を展開しているのか、この点に焦点を当てて稿を改めて論じてみたい。

附記：本稿は科学研究費補助金・基盤研究（C）「国際漢学における日本楚辞学の位置づけと意義」（課題番号 19K00377）の助成を受けたものである。

1 浅見絅斎の伝およびその学と思想については、拙稿「浅見絅斎講『楚辭師説』研究序説―埼門派の学と思想―」『宮崎公立大学人文学部紀要』（第二八巻、二〇二一年）を参照。なお、論文題の「埼門」は「崎門」の誤り。

2 石本道明「淺見絅齋『楚辭師説』小考」『國學院雑誌』第一一六巻、第一二号、二〇一五年。

3 「靖獻遺言講義跋」近藤啓吾・金本正孝編『淺見絅齋集』国書刊行会、一九八九年所収、三六四頁。

4 なお、門生による『靖献遺言』の講義筆録や、近代以降の研究者による注釈書も『靖献遺言講義』と題するものが少なくなく、以下でも書名としてはそのまま用いざるを得ないため、この点に注意が必要である。

5 貞享四年の年の九月三十日から元禄元年となる。

6 詳細は「第二章［附］靖献遺言の改訂」近藤啓吾『増訂淺見絅齋の研究』（臨川書店、一九九〇年）および近藤「解題」近藤・金本編、前掲書参照。

7 当該書「解題」によると、所収テクストは沼田宇源太刊『靖獻遺言講義』（明治四四年刊行）の本文を影印で収録。当初は伝存する中で最も早期の刊本である青表紙・無刊記本を復刻しようとしたが、伝存する諸本は全て満紙の書き入れがあって読み難いため断念。沼田本の誤植を（上述の無刊記本に拠り）改訂した上で影印で収録したと言う。

8 使用した写本については当該書「解題」には「写本によって収める」とのみ記され、写本名が具体的に挙げられていないが、近藤啓吾『靖獻遺言講義』（国書刊行会、一九八七年）「凡例」に以下の写本を近藤が家蔵し、参考文献として用いたとある。浅見絅斎『講説』、浅見絅斎『講義』、若林強斎『講義』、谷秦山『講義』、西依墨山『講義』、落合東堤『書き入れ』。なお、本文で述べるように、『講義』の初刊本として寛延元年本があり、これを底本として採用するものもあるが（阿部吉雄他編『朝鮮の朱子學』明徳出版社、一九七七年等）、近藤は、寛延元年本は写本と比べると、刊行者によって全体にわたり多くの改変が加えられており、絅斎による講義の本来の姿ではないと指摘している（巻六「謝枋得」「余説」近藤、前掲『講義』に具体例。更に詳細は近藤「解題」近藤・金本編、前掲書参照）。

9 なお「靖獻遺言跋」もあるが、こちらは『靖獻遺言講義』の跋文である。

10 谷秦山（たに・じんざん。一六六三―一七一八）は土佐藩に伝わった朱子学「南海朱子学派」に属する一人。始め浅見絅斎、次いで山崎闇斎に師事した。

11 谷秦山『靖獻遺言講義』。近藤、前掲『講義』七四四頁所引。

12 楠木正成（生年不詳―一三三六年）は幕末から近代日本において尊王の忠臣として盛んに称揚されたが、崎門派による尊崇もこのことに力あったと思われる。絅斎の高弟強斎が開いた学堂「望楠軒」は正成にちなんだ命名である。

13 清涼殿への昇殿を許される家柄の上級貴族。

14 竹内式部と『遺言』との関係について詳しくは、近藤、『淺見絅齋の研究』、一三一―一三三頁参照。

15 『遺言』の刊行状況についてより詳しくは、近藤、前掲『淺見絅齋の研究』一二頁参照。

16 野山獄（のやまごく）は萩にあった長州藩の獄。

17 吉田松陰「屈原」、「二十一回未焚稿」（安政元年）「詠史八種　靖獻遺言を讀むに因りて作る」、「松陰詩稿」山口県教育会編『吉田松陰全集』第六巻、二〇一二年、四五―四六頁。

18 林田愼之助『幕末維新の漢詩：志士たちの人生を読む』筑摩書房、二〇一四年、七三頁。

19 出典に「〈思起〉を〈憶起〉と推敲あり」とあるに従う（『高杉晋作全集』四四九頁）。

20 高杉晋作「囚中作」堀哲三郎編『高杉晋作全集』（下巻）人物往来社、一九七四年、四四九頁。

21 栗本鋤雲「匏庵詩集」一八頁、日本史籍協会編『匏庵遺稿二』（続日本史籍協会叢書）、東京大学出版会、一九七五年復刻。

22 西郷隆盛「偶成」、西郷隆盛全集編纂委員会編『西郷隆盛全集』第四巻、大和書房、一九七八年、二七頁。

23 近藤啓吾『靖獻遺言講義』国書刊行会、一九八七年、七五八頁。

24 以下、近藤・金本編、前掲書所収テクストを底本とする。底本は漢字カタカナ混じり文の一部に漢文が混じり、返り点が打たれているが、本稿では返り点は打たずに読み下す。なお、阿部他編、前掲書（底本は寛延刊本）を参照し、送り仮名や読点等に若干の変更も加えた。また、底本と阿部本収録版には文字の異同が少なくないが、煩雑さを避けるため、大きな異同に※印を付すに留める。

25 絅斎のこの考えは朱熹『楚辭集注』前序の「庶幾讀者得以見古人於千載之上、而死者可作又足以知千載之下、有知我者而不恨於來者之不聞也」を想起させる。

26 以下、原拠文の出典については、近藤、前掲『講義』一四―五三頁に多くを負っている。

27 史記「屈原伝」を引用して経緯を補うが、『史記』本文とは若干の異同がある。絅斎は字句に変更は加えていないが、部分的に割愛している。

28 絅斎の湯武革命に対する思想的立場について詳細は、前掲注1拙稿参照。

29 先に見た『楚辭集注』「離騷」序中の「原」については、逐一「平」

に改めていることから考えると、朱熹の文を尊重するためではなく、絅斎らしからぬ訂正漏れであろうか。

30 朱熹『集注』は「曾傷爰哀…人心不可謂兮」句に注して「按此四句若依史記移著上文懷質抱情之上…文意尤通貫」と言う。

31 沼田本講義に「句トアルハ此句ギリデ、ハッキリト二主ニ事ヘタ「ガ見エル」と言う（近藤・金本編、前掲書、二〇頁）。なお、沼田は講義執筆に当たって、崎門に連なる内田周平所蔵の書入本を用いて補正をし、内田の厳密な校訂を経たとしており、更に補正を加える土台に用いた写本二種についても、強斎『靖獻遺言』講義との類似から絅斎門下に伝わったものと推測、つまり自身の講義は絅斎門下に伝わった内容を反映するものとしている。

32 傍線部では原拠の表現が再編されている。原拠の『後漢書』「荀韓鍾陳列傳」では「荀爽、鄭玄、申屠蟠俱以儒行爲處士、累徵並謝病不詣。及董卓當朝、復備禮召之」。

33 『朱子文集』に「答尤延之」（巻三七）および「答潘叔昌」（巻四六）を収める。

34 『遺言』は「榦」を「幹」に誤る。

35 ここには崎門派の特徴が見える。崎門派は実践を重視して、林家に代表される広く修める学風を批判し、学ぶべき文献を厳選（限定）した。詳細は前掲注1拙稿参照。

36 例外的に、『集注』前序「原之爲人」の箇所のみ字が残る。この点については、前掲注29参照。

37 近藤、『講義』、一六頁。

38 この点について、沼田本は「字で呼ぶのはその人物に敬意を示すことになるため、敢へて名を用いて、日本人が日本人の道を明らかにするための参考とする意を示した」としており、近藤もそれを踏襲している。沼田本は絅斎門下に伝わったものである可能性があるため（前掲注31）、絅斎の説を伝える可能性はあるが、確証とは言えない。